

# ひょうご 水百景

No.92 明石川（明石市）

～西国街道と明石海峡を押さえる要衝・明石城の防御線～



写真-1 伊川合流点付近の明石川（平成30年6月撮影）

## ■ 今年が明石築城四百周年の年

上の写真-1は、明石川とその支川・伊川の合流点付近を撮影したものです。江戸時代中期の明和元（1764）年頃に萩藩の絵図方・有馬喜惣太（ありまさうた）らが書き上げた『中国行程記』によると、西国街道が明石川を渡る箇所について、「川幅四十間（≒70m）陸渡り」と記されていて、普段は水量が乏しく、旅人は歩いて渡っていたようです。現在の明石川も、国道2号の少し上流付近の川幅は約70mで、江戸時代とそれほど変わっていません。

また、文化元（1804）年に著された『播州名所巡覧図絵』に「明石川」の絵（図-1）があり、河原には屋台が出ていて、流れに架けられた木橋を人々が渡ろうとしている姿が描かれています。川の西（絵の左側）には藁葺屋根の商家や茶店が並び、北には堤防沿いに連なる松林と王子神社の鳥居や社殿が見えます。川の東（絵の右端）には、松が連なる堤防に惣門「姫路口門」が設けられており、瓦屋根の門と塀があったことが伺えます。その説明には「惣門の外にあり。川中二丁（≒218m）余、徒歩（か）渡り有。源は三木郡に出て、上に衣川、二越の名あり。」と記されています。（衣川、二越川の位置は不明）

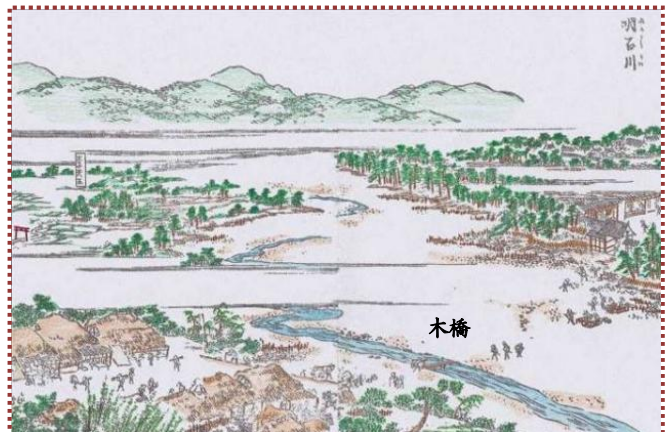


図-1 「明石川」（『播州名所巡覧図絵』から引用・加色）

明石川の川幅が、『中国行程記』と『播州名所巡覧図絵』ですいぶん開きがありますが、この明石川を外堀として、元和5（1619）年に明石城が築かれました。

なので今年（平成31年）は、築城からちょうど400年目に当たります。ということで、今回は明石城と外堀の機能を果たしていた明石川について調べてみました。

## ■ 安土桃山時代、高山右近が明石川などを外堀として船上城を築城

織田信長の死後、天下統一をめざす羽柴秀吉は、天正 13 (1585) 年大規模な国替えを行います。「天正の国替え」と呼ばれ、この時明石郡には、キリシタン大名の高山右近が摂津国高槻城から移ってきます。右近は、一旦枝吉 (しきつ) 城<sup>※1</sup> に入城し、船上 (ふなげ) 城の築城と城下町の建設に取り掛かります。

天正 14 (1586) 年に完成したとされる船上城は古城川の河口付近に築かれた平城で、現在の明石警察署の西にある小高い丘が本丸跡、宝蔵寺の東南部付近が大手門跡と伝えられています。

東の明石川、乙樋川、西の高浜川が外堀の役割を担い、本丸跡の北から東を流れる古城川が内堀の役割を果たしています。江戸時代の中頃まで、古城川下流の密蔵院裏に船繋場があったといわれ、明石海峡の速い潮流から船を守るための港を内陸部に設けて、瀬戸内航路を利用して堺に行き来する貿易船の中継港としても使用されていたそうです。(図-2 参照)

その後、右近は天正 15 (1587) 年に発令されたバテレン追放令によって船上城を追放されてしまいます。右近追放後は秀吉の直轄領となり、何人かの城番が置かれたようです。

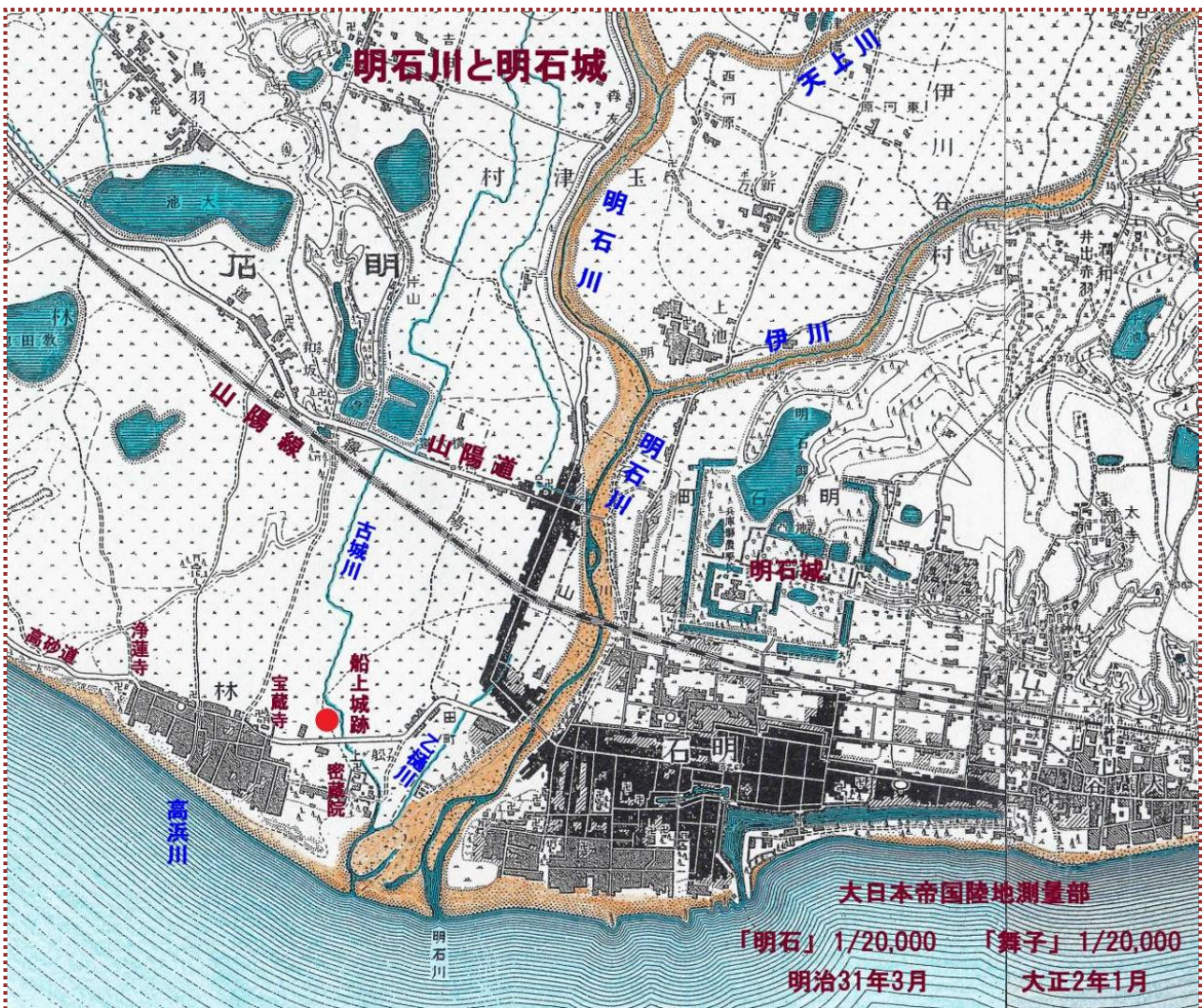


図-2 明石川および明石城周辺の地図

※1 枝吉城：現在の神戸市西区枝吉 (えだよし) 4 丁目付近にあった城。城の南には山陽道が走り、明石と三木を結び三木街道が通る要衝の地。赤松氏の被官で明石郡を中心に勢力を持っていた明石氏が枝吉城を築いたと言われている。築城時期は明確ではないが、枝吉城の正面にある報恩寺が永享元 (1429) 年に建てられたことから、その前後ではないかとされている。



写真-2 水田の向こうにある小山が船上城本丸跡



写真-3 鳥居の向こうに古城大明神の祠がある



写真-4 船上西公園にある船上城跡の説明板

### ■ 船上城は姫路城の支城になる

慶長 5 (1600) 年 9 月の関ヶ原の戦いの後、播磨は姫路藩 52 万石が立藩、池田輝政が領有することになり、姫路城を居城とし領内に 7ヶ所の支城を所有します。船上城はその一つで、輝政の四男・利政が城主となりました。その後、慶長 13 (1608) 年には輝政の甥の池田出羽守由之<sup>※2</sup>が明石郡を 4 万石で治めました。

由之は、明石川の氾濫から船上城と城下町を守るために、明石川右岸に二重の堤防を築き、松の木を植えて松並木を造りました。この堤防は、「出羽殿堤」と呼ばれたそうです。

『播州名所巡覧図絵』では、左岸側にも松並木が見られることから、明石城築城後、明石城下を守るために左岸側にも堤防を築き、松を植えたものと思われます。

慶長 20 (1615) 年の大坂の陣で豊臣家が滅亡すると、江戸幕府は「一国一城令」を発令し、船上城は支城としての機能を失います。

船上城跡は、現在ほとんどが宅地や農地になっていて、田んぼの真ん中にある小山の本丸跡に古城大明神の祠が安置されていて、その傍らに船上城の説明板があったようです。今は荒れ果てて城跡を示すものは何もなく、近くの船上西公園の片隅に船上城跡の説明板が立っただけです。

また明石川の南西にある織田家長屋門（明石市指定文化財）は、船上城の侍屋敷の長屋門を移築したものと伝えられています。

※2 池田出羽守由之：天正 5 (1577) 年、尾張国犬山で池田元助の嫡男として生まれる。天正 12 (1584) 年の小牧・長久手の戦いで、父の元助は祖父・池田恒興と共に討死した。由之は 8 歳であったため、池田家の家督は叔父である池田輝政に引き継がれたが、輝政は由之を不憫に思い、成長後の慶長 6 (1601) 年に播磨国佐用郡に 2 万 2 千石を与えた。由之は平福に利神城（りかんじょう）を築き城下町を造った。（『ひょうご水百景』No.40 参照）慶長 14 (1609) 年には 3 万 2 千石に加増され、備前国下津井城の城番になる。慶長 18 (1613) 年に輝政が死去し、その嫡男・利隆が家督を継ぐと、由之も下津井から播磨国明石城へ移るが、その利隆も元和 2 (1616) 年に死去する。家督を継いだ利隆の嫡男・光政は、幼少を理由に元和 3 (1617) 年に因幡国鳥取藩へ移封させられる。これに伴い由之も明石城から米子城へと移ることとなった。この頃、由之は幼君の光政を補佐していたが、元和 4 (1618) 年江戸から米子へ戻る途中、怨みにより大小姓の神戸平兵衛により刺殺された。享年 42。

### ■ 大坂の役後、西への備えとして明石城を築城、明石川は外堀の役目を再び担う

播磨国は、畿内の入口に当たる重要な位置にあり、京・大坂を西国から防衛するには、播磨の守備を固めなければなりません。西国将軍と呼ばれた姫路藩主・池田輝政の死後、跡を継いだ長男の利隆も病死したため、西への押さえは、姫路、明石、尼崎の三段構えとし、そこに譜代大名を配置することになります。

元和 3 (1617) 年 7 月 14 日に徳川四天王の一人で伊勢桑名城主の本多忠政が姫路藩 (15 万石) に入封します。そして同年 7 月 28 日に忠政の甥にあたる小笠原忠真 (ただまさ) が信州・松本城 (8 万石) から 2 万石の加増を受けて新設された明石藩 (10 万石) に移封となり、船上城に入城しました。また、尼崎には同年 7 月戸田氏鉄 (うじかね) が近江国膳所 (ぜせ) から 5 万石で入封します。そして、同年 10 月、尼崎の地に新城を築く沙汰が下り、翌年の 3 月に明石に新城を築く沙汰が下されます。

小笠原忠真の叔父である本多忠政は、明石築城の沙汰が出る前の元和 3 (1617) 年 11 月、築城の候補地として、塩屋、和阪、人麿



写真-5 松本城

山の3ヶ所を選定し、模型を造って日高右衛門兵衛、石川右京、山口主水の3名に持たせ、将軍・秀忠の決裁を仰ぎます。秀忠は、人麿山を新城の地に指定します。人麿山は、六甲山系の裾が西に伸び、明石川によって中断された洪積台地の突端で、西国街道と明石海峡を押さえるには絶好の地です。大阪湾の咽喉部にあたり、戦国時代には戦略地として争奪が繰り返された要衝の地です。

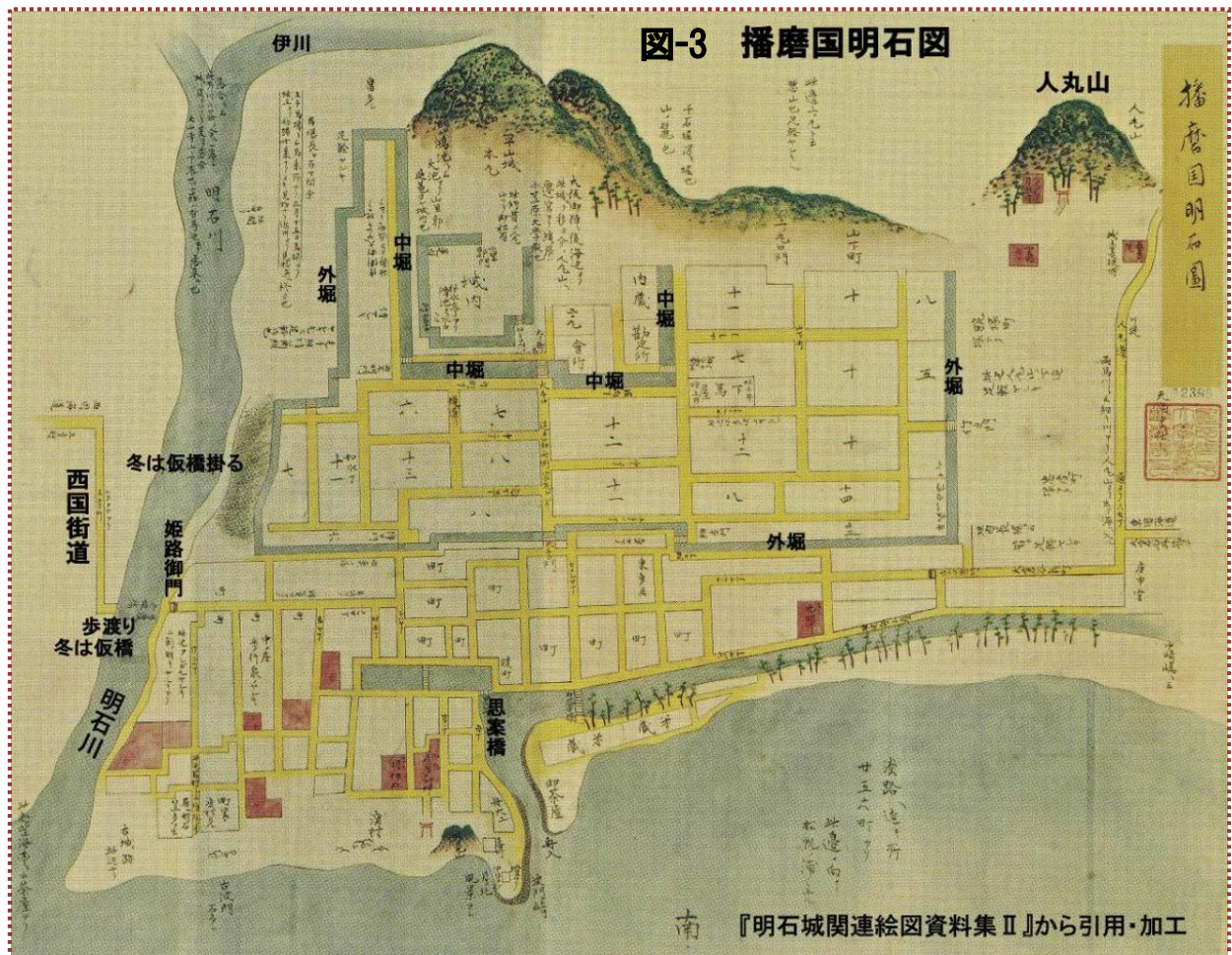
忠政は、明石川とその左支川・伊川を西・北の防御線として、新城を明石川の東側に築くこととし、自ら指揮監督して縄張りを行っています。元和4(1618)年10月、秀忠は旗本・都築弥左衛門為政、村上三右衛門吉正、建部三十郎政長らを明石築城の奉行として派遣し、築城費として銀子(ぎんす)一千貫目を支出、京都、大坂、堺方面から多くの商人が来て、石垣・土塁・濠の工事を入札で請け負い、元和5(1619)年正月に始まった工事は8月に竣工しました。

一国一城令により破却された明石領内の三木城、船上城や姫路領内の高砂城の遺材は新城の資材の一部として再利用され、秀忠からも伏見城の遺材の一部が与えられました。城主居屋敷郭の正門切手門(現・人丸山月照寺の薬医門)と本丸西南の坤櫓(ひつじさるやぐら)は伏見城の遺構で、同じく東南の巽櫓(たつみやぐら)は船上城の遺構とされています。



写真-6 明石城(平成30年3月JR明石駅ホームから撮影)

明石川は、明石城の外堀の役割を担っていたため、当然のことながら橋は架けられていません。江戸時代後期に描かれたと思われる『播磨国明石図』には、西国街道が明石川を越える箇所(現在の一般国道718号明石高砂線・大観橋\*3付近)と王子町東の2ヶ所に、「歩渡り 冬は仮橋掛ル」とあり、冬の渇水期には仮橋が架けられていたようです。図-1の『播州名所巡覧図絵』に描かれている木橋がその仮橋と思われる。



また、江戸時代末期に描かれた『文久年間明石町之図』では、現在「嘉永橋<sup>※4</sup>」が架かっている辺りに「王子上ノ橋」という名の橋が架かっています。

※3 大観橋：西国街道の姫路口門の所に江戸後期の天保 15（1844）年に建設された木橋で、人々が大変喜び当初は「大歓橋」と命名されたが後に「大観橋」に改名。さらに国道 250 号の開設に伴い南へ数m移された。橋の西側に「大歓橋」と刻まれた旧橋の親柱が立っている。

※4 嘉永橋：文化8（1811）年に建設され永久橋と名付けられたが、嘉永 7（1854）年の地震で崩壊、再建されて「嘉永橋」に改名された。大正 10（1921）年の洪水で流失し昭和 2（1927）年に復旧。昭和 35（1960）年の台風 30 号により被災。現在の嘉永橋は何代目かわからないが、平成 20（2008）年 10 月に供用開始されている。なお、江戸時代、明石では寛文 2（1662）年 5 月 1 日と嘉永 7（1854）年 11 月 5 日に大地震が起きている。



写真-7 嘉永橋



写真-8 大観橋



写真-9 「大観橋」親柱

## ■ モノローグ

昨年の日本列島は、地球温暖化の影響なのか、想定を超える雨・風・高潮に見舞われ、それに地震も加わって、文字通り「災害列島」と化した 1 年でした。今年はどうか平穏な年でありますように、と願わずにはいられません。ただ、“災害 5 年周期説”によると兵庫県は今年ヤバイ年です。もっとも出水期前に元号が変わるので流れも変わるかもしれませんが……。

さて、明石城は今年築城 400 周年ということで、3 月 23 日から 11 月 30 日までの間、「明石築城 400 周年記念事業」として、桜のライトアップや能舞台を活用したイベント、フルカラーLED による光の明石城、観月会など、また関連事業として流鏝馬（やぶさめ）や B-1 グランプリなどさまざまなイベントが開催されます。ご家族で明石公園に足を運び、のんびりと一日を過ごしてみてもいいのではないでしょうか。

### ホシアサガオ（星朝顔）

ヒルガオ科サツマイモ属の一年生草本。熱帯アメリカ原産で、第二次大戦後に主に西日本に帰化した植物で、茎は蔓となってよく分岐し、他の物に巻き付いて長さ数 m になる。花期は夏から秋にかけて。葉腋に葉柄より長い花柄を出し、直径 1.2~1.5cm ほどの淡紅色で中心部が濃紅色の漏斗型の花を 10 個以上まとめてつける。花は上から見ると五角形から星形をしている。大豆畑などにおいて強害雑草とされ、マメアサガオなどとともに帰化アサガオ類として問題視され、防除技術について研究が進められている。また、環境省の生態系被害防止外来種リストにおいて、その他の総合対策外来種に指定されている。

嘉永橋上流の明石川右岸堤防に咲いていた。



写真-10 ホシアサガオ（平成 30 年 10 月撮影）

【参考資料】

- 1 『播磨の街道～「中国行程記」を歩く』 橘川真一著 平成 16 年 1 月
- 2 『播州名所巡覧図絵』 村上石田著 文化元年
- 3 『姫路市史 第 14 巻・別編 姫路城』 姫路市 昭和 63 年 7 月
- 4 『明石藩略史』 黒田義隆編著 昭和 56 年 10 月
- 5 『史話 明石城』 黒田義隆著 昭和 50 年 11 月
- 6 『明石城関連絵図資料集Ⅱ』 宮本 博 編集 平成 29 年 3 月
- 7 『明石郷土の記憶デジタル版～あかし文化遺産 14川と橋』 明石市立図書館
- 8 『船上城、枝吉城、池田由之、ホシアサガオ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 31 (2019) 年 1 月 『ひょうご水百景』 No.92

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.92